

る事であつたから。

然し、私は間もなく、私を善い子としてゐた母の名望をだいなしにしてしまつた。實はこれ迄は私は母から賞められるのが全く愉快であつたのだが。そして父の前では名望が上つた、と云ふのは父はかのフリードリッヒ大王が部下の將校に對してした様に子供達に對した。即ち擲り合ひをするを罰するが、しかしどうかして擲ぐられて來ると馬鹿にすると云

ふ遣りかたであつたから。

或る時、私は私の相手方の上にのしかゝつて、ゆつくりと嚇した時に、彼は私の指の骨まで噛みついた、そのため私は一週間も字を書く事が出来なかつた、また之は私には最も危険な傷であつた事を思ひ出す。そしてこの傷がまた私とこの相手との親しい友情を結ぶ基となつた。——かう云ふ事は大人になつてからもよく起る様に——。(完)

譯 了 の 後 に

艶 子

拙いながら、先頃より(第十九卷第九號以降)紹介して居りました「わが幼時」の譯を了へるに當り、感じた事などを申上たく思ひました。もとより、かの十九世紀の獨逸の三大劇作家ドラマティストの一人なるヘッベル先生のこの作を、子供中心の立場から眺めるのは、作者に對して或は失禮な事かも知れませんが、其處は容して頂きませう。

先づ人は凡て何歳頃からの事が記憶に残つてゐるものであるかと云ふ事は人によつてまち／＼の様です。文學的天才をもつた人はどうも普通の人より早い時期の記憶をよくとゞめてゐるのではないでせう

か。あの有名な小説家ディッケンスはかの「デビッド・カッパーフィールド」の中で「我々は大抵の人の普通考へるよりもつと早くからの事を記憶してゐるもので、ごく小さい子供の時代の事物の觀察は其の嚴

密な事、正確な事に於ては實に驚くべきものである
と私は思ふ、實際またこの點に特に著しくすぐれた
子供は大きくなつてから更にこの力を得ると云ふよ
りも、寧ろ幼時にもつてゐた力を失はないのであら
う。殊にかう云ふ人に於てはいつも生々として若々
しく、おだやかなまた喜ばしい元氣をも子供の時そ
のまゝに持ちつゞけてゐるものである。』と、且デビ
ドの話として彼が二歳になるかならない中に、初め
て歩きはじめの時の有様を想ひ起してかいて居りま
す、二歳頃の記憶と云へば随分早くからあると驚か
されますがこのヘッベルのをよみましたも、二のどこ
ろに父と母が食物がないために起すハラ／＼する様
な舞臺面の記憶を、「二歳でない迄も三歳の時」と申
して居りますから、既にこの頃からの記憶は有り得
る事なのでせう。

また子供の觀察は全く嚴密に正確です、そして私
は一にあらはれてゐる家の様子、面白い描寫を目に
見る様に感じました。かうした細かい觀察の印象さ
れることはあり得る事と思ひます。またこの子が坊
さんを怖がつたと云ふ事などこれは皮肉を云つてゐ
るには相違ありませんが、幼ない頃には有り勝ちな

事でせう、今の子供が巡査をこはがるのもよく似て
居ります。

どちらかど云へば下層の生活で、しかもその近隣
の印象と、そこにたゞよふ空氣が子供に與へるその
波動が誠にしんみりと出てゐる様に思ひました。母
が父の蔭になつて、子供を憫み子供をかばふ心持は
特に中以下の生活には有り勝ちな事と思ひます、こ
とに二の終りに「矛盾がわるい結果を來すと云ふ事
は、私のこの經驗では、なかつた。何となれば人生
にはまだ種々の矛盾があり、人間の本性はこれに對
してまた適應する事が出来るものだ」と云ふ言葉は、
あまりに教育に熱中しすぎて、當然在る人生の實相
から子供を隔離して、たゞ眞に善に美にとのみ願ひ、
反つて温室の花同様、一寸の風にもたへられない、
弱い教育をしやすい私達には、一服の清涼劑の様に
思はれます。

また三で、子供が誰もから可愛がられる様子は讀
んで行く中にも思はず微笑ますにはをられませんで
した。「安全と云ふ感じのために」と筆者は申して居
りますが、これには種々の意味が含まれて居るので
はありますまいか、俗に云ふ「子供が可愛い」と云

ふ言葉は之を更に解剖して見れば大人が何か心配で胸が一杯になつてゐる時に、ふと子供に逢ふと、その心のムシヤクシヤを何處と宛もなく放散して、氣がかるくなる、それを「子供が可愛い」と云つて現はす事もありませう、又大人同士の間では誰も彼も心の重荷を背負てゐるためにどうも氣が疑る、それが子供に對する時は何となく柔らいた氣分になる。或はもし胸に祕密をもつ人は、大人の前では氣取られはせぬかどうも心配になるが、子供を相手の時には先づ／＼安心と思ふ、その外種々の場合がありませうが「安心と云ふ感じのために」と云ふ短い言葉は世間一般に大人が子供に對する時の心持を充分にうがつて居ると思はれます。またこゝにあげてある子供と大人との交渉はまことに面白いと思ひました。ことに同居人とこの子供との接觸、そこに取かはされた怪談、幽霊談などはさぞ子供が喜び、また聞きたがつた事ませう。教育的か、非教育的かと云ふ定規ばかりでこの生きた人間自然の接觸をはかつて行きやすい私達が、こゝを讀みます時に、そこに何とも云はれない美しい人間本性の光を見出し、かうした時にうける子供の印象の強さに驚かされてしまひま

す。左官屋のオールにしても、女労働者メタにして自分も此の子を教育しやうなどと云ふ意識があつたのではありません。たゞ人間が本然的に子供に對し、また近所の人に對しておこる友情のために、従つて大膽に、飾り氣のない自己全體を何の躊躇もなく投げ出して子供に與へたに相違ありません。ですから子供はその話を面白がつて聞き、また喜んでなついたのでせう。ことに私はこゝに描寫されてゐる左官屋オールの心持ちに吸ひ込まれる様な氣が致しました。人のよい、慾のない、子供好きなの老爺は、どんなにかその周圍に、ことに子供に、たゞ形成のそなはつただけの教育では與へ得ない一種の力づよい感動を與へた事ませう。此處でヘッセルは「子供を喜ばせるには氣立てさへよければそれで足りるから」と申して居りますが、全く、私達が、あまりに形式にとらはれ、研究に没頭した結果、當然人間として持つて居る筈の心の潤ひ、そのやさしさを失つてしまつて、何でもかでもたゞ子供を自分の研究の對象とばかり考へる様になつては大變だと思ひます。オールが白黒で何か晝く、子供がそれを喜んで見てゐるあたりの話、私は此處をよみながら幼稚園

の机を思ひ出しました。そして三十人も四十人も、どや／＼と一緒にあつた時から、分團保育の實現によつてこのオール爺ほどの頓智はなくとも、かうした、それこそホロリとする様なうれい保育が出来たのを喜ばずには居られません。

またウイスキーをのむ所などは可笑しくもあり成程とも思はれます。子供の父がこの宴會を禁ずるのも無理はありませんが、さりとてオールがこつそりと子供相手にその淋しい生活の唯一の慰めである日曜日のこの宴會をするのをやめさせるのも氣の毒です。その間に立つたこの子供が、「内證で」と云ひきかされて、此處に出席してゐた時は、子供ながらに多少困つた事でせう。しかも筆者が「指拔一杯づゝ」と云ひ「その分量が健康には害にならぬ程で」と云つてゐる所に、大人が、親が、いつも子供の監視役にこそ立ちますが、そして事實以上に誇大して物を心配したり叱つたりは致しますが、しかもよく實情を見極めて寛大な心で、また人間らしい同情をもつて子供に對し、また周圍に對すると云ふ事の少ない事を考へさせられました。お客が来る、何でも變つた事があればよろこぶ子供達が二人の食客を歓迎した

事や、また爪とるのが嫌で親切にしてくれる人を避けた事なども面白い描寫と思ひました。

いよ／＼四歳でスザンナの學校にはひる所からは、筆者の文體はまた一段と皮肉になつて參ります。

ここに四歳から七歳まで居つたとありますから丁度年齢は今の幼稚園時代に當ります。私は當時の獨逸の學制の事を詳しく存じませんが、私は當時の話の裏に如何に巧みに、如何に鋭く、當時の學制に對して攻撃の矢を向けてゐるのかを充分味へないのが残念ですが、しかしこの當時の私立學校の様子が目に見える様に讀まれました。クリスマス時の贈物の不公平などは、さもあるべしと思ひました。此處で（即ち四の終り）、下女がこの子供を惡意に解釋した所などは、本當に頷かれます。かう云ふ事は時と所を異にした今の時代、私達の日常手近によく見る事です。否私達でさへ、時に自分の受持つ子供を疑ふ事があります。しかしこんな事は考へるだけでもグツとします。厭やな事です。「スザンナの不公平と下女の不都合な行とを私が意識するや否や、私は幼年時代の不思議な樂園を通り過ぎてしまつた。こは極めて早い時期に起つた事であつた。」と云つて筆者はこ

の章を結んで居りますが、本當にこの子にとつて可哀想であつたと思ひます。實際、子供は觀察の鋭敏なものですから、かうした日常接する人、ことにも自分を支配する地位にある先生などのかゝるやり方には如何に小さい胸を痛めるかわかりません。口に不平を云ふ事を知らず、力を以て之に反抗する事の出来ないこの時代には黙つたまふ、しかも心の奥深くに一本の刺がさしこまれる事になりませう。

次にこの私塾に居る間即ち年齢から云つて今の幼稚園時代に、この子供が三つ、人生の要點に觸れた、それを追憶して書いて居るのでありますが、その三要點として(一)自然の力及神の力を認めた事、(二)學友の虐待をうけた事、(三)愛、をあげて居ります。子供が今迄絶對に崇拜してゐた父母から離れて行く心持が、何となく痛ましい様な、しかしまたどうする事も出来ない事かと思ひました。筆者はこゝに「人間本來の獨立心に目覺めて行く」と云つて居りますが、子供が親の心から離れて行くこの時によく理解してやる事がないと、つひに生涯子供は親の無理解をうらみ、親は子がそむいたと思つて悲しむと云ふ事になるのでせう。

暴風雨の様子をよみました時私は思はず噴飯致しました、それでも「小さい奴はどんな時にも元氣のよいものである」と暑い夏の日の午後の物靜かさをかいた終りに加へてある一句は全く成程と思ひました。また水が室に入つてしまつてから雨戸をしめた。滑稽、さては先生が自分もやはり怖いのに無理に先生である云ふ所から空元氣を出して子供を教訓し、それもピカツと電光が來ると小言が口まで來て消えてしまふと云ふ所をよみました時、私はその可笑しい、しかし尤もらしい様子を目にうかべながらまた、この時先生は實際怖つたのなら、すぐに先生だからと云ふその衣を脱いでしまつて、何故正直に怖がつてはいけないのだらうと思ひました。全く敏感な子供には、いくら裝ふても先生が眞の勇者か、附け元氣の者かは、すぐに分つてしまふ事だせう。この子がかくて宗教心を起すにいたる成り行きはつまり宗教をもつ家庭にあるこの子が、その今迄形式的であつたものを、自分のものにしたと云ふのにあるので、兩親をはなれて神に結びつくと云つて居るこの有様は有り勝ちな事でもかも謂ゆる教育家のいろ／＼考へる事だせう。兩親を離れてでなしに兩親

も共に、神に結びついたらば一層よかつたと思ひました。

氣のよい、フウハリとした、どちらかと云へば理智的と云ふよりも感情的なこの子が、學友から虐められるその様子は何となしにあの、家庭は生活難におはれ、子供は小さい頃から自己保存のために戦ふ事を覺える氣の毒な社會を想像させられました。ことに子供のツカレ休みの所が面白く、かう云ふ事をする子供の心持ちを全くよく味ふ事が出来ました。年の多い腕白者におだてられて、氣の弱い兒も一奮發する、そして悪い事を覺える事は有り勝ちな事とせう、この子が幸失敗したのでよかつたのですがしかしこれで成功したとしても果してどれだけこの兒の悪い事をする事に對しての自信が増したでせうか、かう云ふ性質の子供に……。子供は悪友のために果してどれ位損はれるものでせうか。その持つて生れた本性が加ふる外的教唆により、模倣により果して何處迄變へられるものでせうか。

この子の初めて入學する時の有様、母親が、また子供が氣がよくなるかと心配して逃げる様に歸へる所など、私は毎年春の入園當時を想ひ合せて思は

ず微笑まされました。

七の所は本當によく子供の恐怖心が具體的に晝かれてゐるのに共鳴を感じました、人一倍謂ゆる怖がりな子は自分ではそれをどうする事も出来ないのですから、たゞ怖がつた心持に同情の出来る様になりたく且之をたゞいけないと云つて叱らずに何とか導いて行きたいと思ひました。

こゝに筆者は恐怖を二つにわけて一つを一般的のもの、他を之より高等な特殊のものとして居ります、が、こゝに一般と申しますのは人間が自己保存の必要から當然有する本能的の恐怖をさすのでありませう、高等と云つて居りますのが特に想像力のつよいために起るもので、此處でもこの子はこの種の恐怖になやまされ、弟はさうでなかつたとあります。醜い人に對する怖れはよくある様です、小さい子供が鬚のはえた少し難かしい顔の人を見て泣き出すのも同じでせう。骨をきらつたり、文字からすぐその物を目前にえがいて來るのは、餘程想像の強い證據です。私は此處をよみながら、こんな事を考へました。「この時この兒はたゞ怖いとは思つてもこの心持は口にそのまゝ發表出來なかつたに違ひない、それゆゑ爪

で字を削る様な事をしても、先生は何故そんな事をしたかを果して洞察したであらうか。しないとするればこれをたゞの悪戯として吐つたであらう、またこの子が何故か骨を見て震へてゐるかも知わからなかつたであらう。」と、全く私共はお察しがたりないために、子供に對して暴君的の壓制を加へたり、嘲笑的に出たりする事がよくあります。その實、想像力のつよい子供の方が實利的の大人より遙かに深い人生に觸れてゐるかも知れませんのに。「一粒の砂粒でも、外でもない、唯、これが越えがたい大きな山の様に思はれるために子供はその砂粒のまへにテットと立ち止まる」と云ふ句を私は何度くりかへして味ひました事でせう。またその次に「父と子と、事物を量るその秤が、兩方根本的に異つてゐるからである」と云ふ言葉はまことにさうだと思ひました。大人はどうも勝手なものです。とかく偉がる事ばかり知つて、ゐるものです。幼ない時分の事は忘れてしまつて、子供をどうも見くだしやすいものですが、よし大人の眼からは、くだらなくも否寧ろ滑稽にも見える事でも、もし子供が眞實本眞劍に怖がつたり、苦しんだりしてゐる時には、その心持ちになつて同情して

やらなければいけません。大人の尺度で子供の生活をはからないう様に致したいものです。

此の子が堅果鉗クランプを貫つた時の出來事に、まあどんなに怖かつたらうと思ひました。それが何時迄も印象に残つて、夢に、現に、この子を苦しめた事も可哀さうでした。全く子供は私達の思ひもつかぬ、否子供自分にも思ひがけない事で、怖がり苦しむものです。

次に學校の様子を讀んで居ります中に、フト私の感じました事は、想像力の盛な時代にはそれにまかせてある所まで過させても差支へはあるまいかと思ふ事でした。わけもわからない言葉をたゞ勝手に想像して解釋してゐる子供が、必要が來れば正解する様になると云ふ事はさもある可き事で、あまり神經的に考へる教育者が、やれ迷信はいけないの、自然的に考へる教育者が、やれ迷信はいけないの、自然科學にそむいた童話はいけないのと注文してたゞ骨ばかりの智識を子供に與へやうとするのは考へものでせう。子供のあの想像力の盛な時代には、謂ゆる文學的にたつぷりと肉付のある、味のあるものを與へるのがよいのではありますまいか。嘗つてある人が「子供にサンタクロスの話をするのは迷信を養ふ

のであるから考へねばならぬ」と云ふのを聞きまし
た時、私はひそかに「何故いけないだらう、否、害が
どれ位あるのだらう」と考へた事がありました。が、
所謂お伽噺を子供の世界から奪はれる時代がもし此
の後、來るとしたら、私はその様な文明は寧ろ子供
達のために呪はねばならないとおもひます。この世
がたゞ「二一ンが四」と云ふ事ばかりの生活になりま
したら、子供はおろか、私達大人でも一日もたへら
れない事ですから。あのギリシヤの神話をよんで誰
か「これは道理にあはないから不必要だ」と云ふ人が
ありませうか。

いよ／＼此の子が幼稚園期をへて、小學校にう
つる時の當時の學制改革の有様、こゝにあらはれて
ゐる鋭いしかも巧みな攻撃の矢には私も先づ當らず
にのがれる事に致します。それでも「師範學校に於
て煮沸して出來た謂ゆる啓蒙主義と云ふ濾過液は、
先づ空虚な先生の頭に漏斗の口から注ぎこまれ、こ
れが全くそのまゝにまた全國に注ぎ出される」と云
ふ言葉が、私の胸にひどく響きました。老人と孫と
の流星に對する考へで代表されてゐる當時の思想界
の混亂も、さぞやと思はれました。そして、頻りに

今自分のゐるこの時代この國の事を考へました。

それから、子供の印象にのこつた我家の物置や、
近所の穴倉の様子、好奇心にかられて、怖いもの見
たさに子供がいろ／＼苦心もし、またつよい印象も
うける事は何處の何時の時代の子供にも共通の事と
思ひました。幼稚園などでよく破れ帽子や古足袋な
どを何處かの隅から引張り出して來て「おゝ怖い怖
い」と云ひながら妙な腰付きをして怖さうに、しかし
面白さうに、持ちまはる腕白童が目の前にチラつい
て參ります。

初めて町を歩いた印象、その第一印象が如何につ
よく永く残るものかと云ふ事も、永遠と云ふ言葉で
此處にあらはされて居ります事も共鳴せざるを得ま
せんでした。たとひその後如何にあとかたもなく變
化してしまつても尙わが生れし町の幼ない時にあつ
たその面影をそのまゝまた思ひ出し描き出す事が容
易い様に思はれます。しかも四つや五つの子が、母
につれられてヨチ／＼と大道をあるく時、この子が
この時に、一生のこる印象を腦裡に刻しつゝあると
は誰が思ひまうけませう。大人はあまりに忙しくた
だ急ぎの用事を濟ます事にのみ氣をとられて歩いて

ゐますから。私が此處をよみまして感じてゐました矢先フト、町に出ました。商業地の私の町は本當に忙しい往來です。丁度六つ位の子が母に手を引かれてあるいて行きます、私はその子の顔を、その子の眼を見ました。本當にいかにも好奇心に富んだ様子であたりをキョロ／＼見ながら引摺られる様にゆつくりと歩いて居りました、母親は眞直ぐ先を見て急いで居りますのに。

この「わが幼時」の終りの章(十)は、いよ／＼父が我が家を賣拂つた借家すまひの痛ましい經驗が寫してあります。貴族主義の子供が急に肩身がせまくなり、鷹揚に育てられて喧嘩一つ出来ない氣弱い兒が、どう／＼擲り合ひに參加する様になるその移り變りに、私は氣の毒でもあり、又雄々しくもあると思つてよみました。丁度先頃あのジャクロンドンの「野犬の呼聲」をよみました時——これは一匹の穩健な屋敷犬「バック」が未開の極地につれ行かれて、つひに狼の本性にかへるその道行をかいいたものですが——本能の力づよさをひどく考へさせられました。が、その濃さに於て多少の差こそあれ、變化の道行きに何ものか似通ふた所があります。この子が貧困

の生活に没落して、養育院の子を友達とし空想家の生活から、生きるための活動、自己防禦に、目覺めるその心の劇變はこの子にとつて大した事であつたに相違ありません。

引越しの様子の所で「世界の滅亡」の様に思はれたと云ひ、またそれが後には「一つの觀物」となつた事も珍しもの好きの幼年時代には當然の成り行きと感しました。方々の鼠穴から失はれたものが見出されたり、引越し仲間がいろ／＼のものを呉れる所などをよみまして、よく大掃除の時に子供が面白がつて戸棚の隅に這ひ込んで穴をほじる時の様子など浮んで參りました。「子供は全く最後の屑まで利用する事を知つてゐるから」と云ふ言葉は何と云ふ眞をうがつた云ひあらはしでせう。保育室などで、先生が屑籠にと思ふ紙片を、子供はよつてたかつて奪ひ合ふのが彷彿として參ります。

また面白いと思ひましたのはあの庭に熟する梅や梨を約束する所です。實がなると、その熟する時について子供と大人と考が違ふもので子供は早くとりたいし、大人はよく熟させたいのです。大人が熟する迄と待つ中に、近所の腕白童にいつの間にか打ち落されてゐる事はよくあります。

もうこの話の終り頃は、この子は八歳位になつて居る時でせう。手なかまれた子供と親友になつたこの子はある意味で幸であつたと思ひます。